

## 20

## 西南戦争が宮崎県の医療に与えた影響

大西 雄二

大西医院

1871（明治4）年、廃藩置県により日向（現：宮崎県）は6県に分かれた。医学所は2ヵ所あった。1874（明治7）年、明治政府の国民への医療と、種痘普及のため宮崎仮病院が創立された。1876（明治9）年宮崎県が廃止され、鹿児島県合併に伴い県立鹿児島病院宮崎支院となった。

1877（明治10）年、西南戦争が勃発した。西南戦争は宮崎県の山河を血に染め、社会、経済、人的損失とともに医療に大きな影響を与えた。戦争のため宮崎支院は閉鎖された。

西南戦争のなか、イギリス人医師ウィリアム・ウィリス（William Willis）は、門下生を伴って宮崎（当時鹿児島県の一部）に出張した。ウィリスのおこなったイギリス医学の治療は、鉄砲、大砲などの弾丸の銃創による組織の破壊や骨折の処理、弾丸の摘出、壊疽の切断手術、クロロホルムによる麻酔などであった。

高木兼寛は、1849（嘉永2）年、宮崎県高岡郷に生まれた。1866（慶応2）年、ウィリスに就いて医学を修めるため、鹿児島に赴きイギリス流臨床医学を学んだ。1872（明治5）年上京し海軍に勤務、1875（明治8）年イギリスに留学し、クリミア戦争から帰還したナイチンゲールが、病院内に看護婦養成所を創設するのを見た。

西南戦争は初めて銃砲器が使用されそれによる外傷の治療が必要となり、軍陣医学の先駆けとなった。

投降した薩軍医は薩軍傷病者の医療を担当し、延岡に臨時陸軍病院支院が置かれた。1878（明治11）年1月、延岡支院は宮崎町に移され、宮崎支院は傷病兵のほか一般の患者に対しても診療した。

戦乱は伝染病の流行をもたらした。明治10年にコレラは西南戦争の帰還兵士によって全国的に流行した。宮崎県でも2,500人以上の患者が出た。同年痘瘡が宮崎県に流行し薩軍兵士によってもたらされたと思われていた。

臨時陸軍病院（鹿児島支院）は、1879（明治12）年廃止となった。跡を引き継ぎ宮崎病院の経営が開始され、鹿児島県費によって診療にあたった。1883（明治16）年宮崎県が再配置され、鹿児島時代期の公立宮崎病院は廃止された。有志により再開されたが1895（明治28）年種々の事情により閉院となった。

鹿児島県との統合や分離、西南戦争の混乱などあり、医療の中核をなす官公立病院が続かず、宮崎県は「病院不毛の地」であった。宮崎病院では医学所を付設して明治12年から明治18年の間医学生の育成にあたった。医員にはウィリスの弟子が多数いた。生徒数は30名、この中からのち開業したものもあり、宮崎県の医療の中核を担う人材が育った。宮崎医学所跡に石碑が建てられている。

西南戦争による経済の混乱とともに、宮崎県の病院は閉鎖、設立、閉鎖と翻弄された。高木兼寛はウィリスに師事することにより、イギリス流の臨床医学を学び、後年脚氣が食事に起因するとの考えより海軍から脚氣病者を防いだ。さらに慈恵会医科大学・看護学校の創業者となった。

戦乱のなか天然痘とコレラが流行し住民に多大の被害を与え、戦乱と伝染病の蔓延は密接に関係した。銃砲による外傷の治療が日本の軍陣医学の発達の濫觴となった。

西南戦争は宮崎県の医療に多大の影響を与えた。